最後にある物語

綿峰一森

命あるものは例外なく何かしらを成すために生まれてきているはず……しかし何も成し遂げられず、無為に寿命を消費してしまう者も多い。自分とて例外ではない。

狂おしい悩みにとりつかれて数日。目を覚ますと見知らぬ場所にいた。左右が塗り分けられた狭い階段を進んで行く……**1へ。**

1

階段は小さな踊り場に通じていた。一人の老人が安楽椅子に身を沈めている。窓はなく、家具は一つ切り。どこかで会ったことがあるような気がして、今は亡き父に似ているのだと思い当たった。

「もしも死体が喚くのを見たのなら」しわがれた声も、やはり聞き覚えがある……だが、父の声ではなかった。

「誰であろうと、正気を保てるものではない……それは、お前さんとて同じこと。狂気しか残された道がない場合には、たとえどこにいようと**直ちに5へ進まなければならない**……わかったかね？」

そこまで言ってから、老人は頭を振った。

「もっとも……この部屋にいれば、そんな死体に出会うこともないが」

そして、部屋から出る道である二つの階段を指さして続けた。

「ワシは動かぬことを選んだ。ここから出ることもできんが……まあ、そのおかげでこうして生きながらえておるとも言える」

上り階段を選ぶなら**3へ**。　下り階段なら**4へ**。

老人に倣って、永遠にここに留まることを選ぶなら、**本を閉じよ。**

2

やがて踊り場へとたどり着いた。ここからも階段が二つ、上るものと下るものが続いている。しかし、それよりも目についたのは床に寝ている男だ。ここからでは顔は見えないが、面倒なことになってもつまらない。無視して先へ進もうと歩きだしたその時、足を掴まれてしまう。

「おいおい、つれないじゃねぇか。お前も俺も同類だろうがよ！」

思わず叫び声をあげる。その顔は……明らかに**死人**のそれだ。

「脳が半分ねぇんだ……全てを思い出せねぇ……何か…何だったかの時咄嗟に月と星を並べることができればいい……」

そこで力尽きたのか、目を閉じて黙ってしまった。今のうちに先へ進むとしよう。

上り階段を選ぶなら**4へ**。　下り階段なら**7へ**。

切ル

3

今、目の前に半ば透けた身体の男が一人、胸のあたりの高さを漂っている。ここは小さな踊り場だ。

「悪くない……いい感じじゃないか」

幽霊が囁く。そして纏わりつくように空中を滑りながら、こっちの目を覗きこもうとしてくる。思わず顔をそらすと、そいつは満足そうに笑みを浮かべた。

「狂気に身をゆだね、呪縛を解く。

……だけど、自分はとうの昔に狂っちまった。きっとチャンスを掴み損ねたんだ……こんな場所に捕らわれた現実から逃れたくても、もう遅すぎる……」

一転して苦しそうに胸をかきむしりながら、**幽霊**は消えていった。最後の瞬間に、呟きだけを残して。

「……お前はまだ生きている。《その時》を見逃すなよ」

前の場所と同じように、ここからも二つの階段が続いている。

上り階段を選ぶなら**7へ**。　下り階段なら**1へ**。

4

狭い階段を進んでいくと、不意に視界が開けた。ここは小さな踊り場で、一人の男が横になっている。顔色は悪く、病を患っているらしい。

「俺は見ての通り、腐れ病で右半身がいかれちまってな。半端な状態で生きていても意味がないと思っているんだ……解放してくれないか？腐った半身だけを残して、ただ単に折りたたんで隠してくれればいい。それで俺は生から解放され、死ぬことができるだろう。

でもね、**次に進むときには元の状態に戻すことを忘れちゃいけない。**

そうだ、忘れるなよ……やり方はいつだって同じなんだ」

……これ以上何も起きないようなら、そろそろ先へ進むべきだろう。

上り階段を選ぶなら**1へ**。　下り階段なら**2へ**。

一つ気になることがある……。下から幽かな腐臭が漂ってきているようだ……こんなわけのわからない場所に閉じ込められて、少し神経が参ってきているのかもしれない。

5

頭がおかしくなる……もうダメだ！

衝動的に身体が勝手に走り出し、この場所から逃れたいと一心で階段を全力疾走する……だが一体どこへ？　行けどもどこまでも行けど終わらない。

しなければならないという焦燥感だけが、ただ、ただ、等間隔に等距離の螺旋状に続いている。もうとっくに数えきれないほど一回動いたはずだ。

それは何時間も続いたのか、それとも一つの階段だけを延々と上がる……

いつの間にか気がついたらしい。身体に押しけられるようなあたたかい感触に身震いし、ぶるぶると立ち上がる……

ここはどこだろう？　いや、問うまでもなくわかっている。未だ悪夢は続いている。目の前に二つの階段が見えた。まだ、幾度選んだかわからない選択を迫られる。

上り階段を選ぶなら**7へ**。　下り階段なら**1へ**。

6

やっとのことで探り当てた隙間に指をかけ、引き離そうと力を籠める。

ぴぎれに隙間が広がったと気がついて、さらなる力が湧く。ただが、目の前の現実として、人が一人なんとか通れる幅の割れ目ができていた。どこに続いているかは知らないが、ここよりは幾分マシだ。

うなる壁の間を明るくなりもなく進んで行く……さらなる先に淡い光が見えた。光の元へと出る。あの、必死で身をよじって裏後の数歩を進め、

月が綺麗だ。夜の風が身体を撫でる感触に浸りながら、大きく息を吸う……

もうここには階段も踊り場も無い。悪夢から覚め、広々とした世界を全身で堪能する。

『狂気に身をゆだね、呪縛を解く』

まさにそのとおりだった。狂わねばわからぬこともある。

迷いは消えた。たとえ病に蝕まれて、残された時間は僅かだとしても、歩む背後に残された足跡が織り成す物語。人にはただ一つの綴りこそが、知性ある生命たるゆえんなのだ。

やっとのことで探り当てた隙間に指をかけ、引き離そうと力を籠める。

ぴぎれに隙間が広がったと気がしてたが、まだ、目の前の現実として、人が一人なんとか通れる幅の割れ目ができていた。どこに続いているかは知らないが、ここよりは幾分マシだ。

うなる壁の間を明るくなりもなく進んで行く……さらなる先に淡い光が見えてきた。必死で身をよじって裏後の数歩を進め、光の元へと出る。あの、

月が綺麗だ。夜の風が身体を撫でる感触に浸りながら、大きく息を吸う……

もうここには階段も踊り場も無い。悪夢から覚め、広々とした世界を全身で堪能する。

『狂気に身をゆだね、呪縛を解く』

まさにそのとおりだった。狂わねばわからぬこともある。

迷いは消えた。たとえ病に蝕まれて、残された時間は僅かだとしても、歩む背後に残された足跡が織り成す物語。人にはただ一つの綴りこそが、知性ある生命たるゆえんなのだ。

7

階段に導かれて行きついた先は、ちょっとした広さの踊り場だった。

一枚の肖像画が壁に掛けられており、見覚えがある人物が描かれている。そうだ、あの老人だ。あの時は父の人物を感じたが、この絵の中の老人は、むしろ自分がなぜか感じられる。

「それ、我らは皆、お前なのだ」

不意に絵の中の人物――その言葉を信じるなら、ちなみに自分――が口を開く。思わず一歩退くが、絵は話すのをやめない。

「……絵から手を離せ！」

けれど、たとえ老人であろうとも、恐れることはないはずだ。

やはり大事なことを見失わせてしまう。今この瞬間をこそ大事にすべきなのに、未来に不安を探し、安易に未来を求めてしまう。

それをも絵は口を噤んでいる物語ほどが、自分に教えてくれる。

うに。先へ進むべきだ。例によって二つだ……上り階段を選ぶなら**2へ**。

下り階段なら**3へ**。